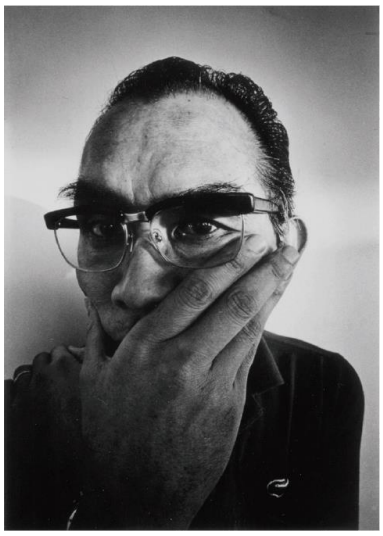
生誕 100 年 石元泰博写真展

Ishimoto Yasuhiro Centennial



《セルフ・ポートレート》1975 年

会期

2021（令和 3）年 1 月 16 日（土）－3 月 14 日（日）会期中無休

会場

高知県立美術館　2 階　第 2・3 展示室、石元泰博展示室

開館時間：9：00－17：00（入場は 16：30 まで）
観覧料：一般前売 720 円 、一般当日 900 円（720 円）、
大学生 650 円（520 円） 、高校生以下無料
前売券販売：ローソンチケット（L コード 62257）
※（ ）内は 20 名以上の団体割引料金。※年間観覧券所持者は無料。※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、及び被爆者健康手帳所持者とその介護者（1 名）、高知県及び高知市の長寿手帳所持者は無料。

［見どころ］

高知県土佐市育ちの世界的写真家・石元泰博（1921-2012）の**生誕 100 年**を記念し、
東京都写真美術館、東京オペラシティ アートギャラリーとの共同企画にて開催します。

各館独自の切り口から石元の仕事を紹介し、
高知県立美術館では、代表作〈**桂離宮**〉〈**シカゴ**〉〈**東京**〉シリーズをはじめ、
知られざる**初期作品**から**建築写真**、**最晩年の意欲作**まで、
半世紀以上に渡る石元の多彩な仕事を、愛用カメラや掲載誌などの豊富な資料とともに紹介し、
その色褪せない孤高の眼差しを検証します。

主催：高知県立美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会、RKC 高知放送
協賛：ライオン、大日本印刷、損保ジャパン
助成：芸術文化振興基金
後援：高知県教育委員会、高知市教育委員会、土佐市、土佐市教育委員会、KCB 高知ケーブルテレビ、エフエム高知、高知シティ FM 放送
共同企画：東京都写真美術館、東京オペラシティ アートギャラリー
他館の会期：東京都写真美術館　2020 年 9 月 29 日（火）－11 月 23 日（月・祝）
東京オペラシティ アートギャラリー　2020 年 10 月 10 日（土）－12 月 20 日（日）
※いずれも終了しました。

お問合せ・担当：高知県立美術館 学芸課 天野、朝倉　〒781-8123 高知市高須 353-2／Tel: 088-866-8000／Fax: 088-866-8008
Web: https://moak.jp/event/exhibitions/100.html／E-mail: iypc@kochi-bunkazaidan.or.jp
石元泰博作品画像すべて： ©高知県，石元泰博フォトセンター

展覧会の概要

石元泰博（1921-2012）は、対象の本質を掴み取る透徹した眼差しと、厳格な画面構成が際立つ作品によって、国内外で高い評価を受けている高知ゆかりの写真家です。
農業移民の子として米国サンフランシスコに生まれ、少年時代を高知県高岡郡（現・土佐市）で過ごした石元は、戦後シカゴの通称「ニュー・バウハウス」で先端的なモダンデザインの教育を受け、石元作品の根底を成す造形感覚を磨きました。その後は東京を拠点に活躍し、戦後日本において、写真界のみならず、美術、デザイン、建築にわたる芸術界全般に大きなインパクトを与えました。
日本の伝統建築にモダニズムを見出した代表作〈桂離宮〉をはじめとして、都市とそこに生きる人々を見つめた〈シカゴ〉〈東京〉シリーズ、丹下健三、磯崎新ら名だたる建築家たちの作品を撮影した建築写真、同時代の著名人らを個性豊かに捉えたポートレート、密教の世界を精緻に写しとった〈両界曼荼羅〉、無常のモチーフに自らの死生観を託した〈刻（とき）〉、そしてまばゆい色彩に満ちた〈多重露光〉など、その生涯で手掛けた仕事は実に多彩です。
高知県立美術館は、石元の約 3 万 5 千枚の写真プリント、15 万枚を超えるフィルム等の作品、資料を収蔵しています。生誕 100 年を記念した東京都写真美術館、東京オペラシティアートギャラリーとの 3 館共同企画の一環として開催される本展では、この世界最大の石元コレクションを中心に、半世紀を超える写真家の軌跡を網羅的に回顧し、その魅力に迫ります。

――写真を撮ることは生やさしいものではない。
孤独な、自己との戦いの連続にほかならないのである…… 『カメラ毎日』1965 年 12 月号より

図録

『石元泰博　生誕 100 年』
テキスト：磯崎新（建築家）、森山明子（武蔵野美術大学デザイン情報学科 教授）、藤村里美（東京都写真美術館）、福士理（東京オペラシティ アートギャラリー）、天野圭悟（高知県立美術館）、朝倉芽生（高知県立美術館）
発行：平凡社
B5 版　304 ページ
定価：3,300 円+税

※当館ミュージアムショップ他、各種ネットストア、書店等で販売中。

お問合せ・担当：高知県立美術館 学芸課 天野、朝倉　〒781-8123 高知市高須 353-2／Tel: 088-866-8000／Fax: 088-866-8008
Web: https://moak.jp/event/exhibitions/100.html／E-mail: iypc@kochi-bunkazaidan.or.jp
石元泰博作品画像すべて： ©高知県，石元泰博フォトセンター

展覧会の構成

多彩を極める石元の仕事を、写真家の人生を辿るように、それぞれの時代、シリーズごとの編年順を基本に紹介します。

● **カメラとの出会い**

サンフランシスコで生まれた幼少期から、高知での少年時代、そして渡米から戦時中の日系人収容までの過程を旧蔵資料によって辿ります。また、カメラと出会ったコロラド州の収容所や、戦後移り住んだシカゴで取り組んだサロン写真的傾向の最初期作を紹介します。

《アマチ収容所》1942-44 年

● **ニュー・バウハウス**

ドイツの造形学校バウハウスの流れを汲んだ教育が行われたシカゴの通称「ニュー・バウハウス」（石元在学時および現在の正式名称はインスティテュート・オブ・デザイン、略称 ID）でのカリキュラムの様子が伝わる作例や、すでに確かな造形力と独自性が光る石元の在学時の作品を紹介します。

《シカゴ ビーチ》1948-52 年

● **桂離宮（桂離宮 1953,54、桂離宮 1981-82）**

石元の代表作として知られる桂離宮との出会いは、ニュー・バウハウス卒業後、来日してまもなくの 1953 年のことでした。庭園に身を置いた際の触覚性や身体性が顕著な敷石の連作や、モンドリアンなどの抽象絵画を思わせるミニマルで構成的な視点で捉えた新御殿などを中心に、代表カットを紹介します。大修復後に再撮影された 81-2 年版も併せてご覧いただきます。

《桂離宮 中門の乗越石》1953,54 年

● **東京（東京 1950s-70s、山の手線・29、東京 1980s-2000s）**

東京は石元が人生でもっとも長い時間を過ごし、また生涯を通して挑み続けた被写体です。戦後間もない来日当初の 50 年代、高度経済成長期の 60〜70 年代頃、バブル経済から平成期といった時代の移り変わりを、造形性と記録性を往還しながらつぶさに見つめ続けた石元の眼差しを辿ります。

《東京 街》1950-60 年代頃

お問合せ・担当：高知県立美術館 学芸課 天野、朝倉　〒781-8123 高知市高須 353-2／Tel: 088-866-8000／Fax: 088-866-8008
Web: https://moak.jp/event/exhibitions/100.html／E-mail: iypc@kochi-bunkazaidan.or.jp
石元泰博作品画像すべて： ©高知県，石元泰博フォトセンター

● **シカゴ、シカゴ**

石元は、さらなる飛躍を求めて 1958 年末に再び渡米、学生時代を過ごしたシカゴで丸 3 年間写真漬けの日々を送りました。再開発でダイナミックに変容してゆくシカゴの街を、日本のリアリズム写真やロバート・フランクといった同時代の表現にも触発されながら撮影したシリーズを紹介します。

《シカゴ 街》1959-61 年

● **近代建築**

石元は、丹下健三、磯崎新、岡田新一ら、錚々たる顔ぶれの建築写真を多数手掛けたことでも知られています。しかし、それらの写真は撮影後に各事務所や施工会社、出版社等へと手渡されたことで、今まで展覧会としてまとまって紹介される機会はほとんどありませんでした。今回は、当館蔵のプリントに加え、竹中工務店、磯崎新アトリエ、芦原義信アーカイブ（武蔵野美術大学美術館・図書館）所蔵のプリントや、建築雑誌等の資料により、日本の近現代建築を写した石元の建築写真家としての仕事を紹介します。

● **日本の産業**

1964 年に開催されたニューヨーク万博で石元は、日本館（設計：前川國男、会場構成：亀倉雄策）の壁画写真「日本の産業」を担当し、日本の高度経済成長を支えた日本各地の工場地帯を撮影しました。この他にも、日本の産業化や都市開発に眼を向けた作品を紹介します。

《日本の産業 パイプとガスタンク》1963 年頃

● **周縁から／歴史への遡行**

東京を拠点に活動した石元は、60 年代以降、地方取材にも精力的に取り組みました。独自の石仏信仰が根付く国東（くにさき）半島や、御陣所（ごじんじょ）太鼓の伝わる石川県輪島、近代農法がいち早く導入された北海道十勝など、各地の民俗や風土、近代化の様相を写したシリーズを紹介します。

《御陣所太鼓（輪島）》1962-64 年頃

● **両界曼荼羅**

1973 年、石元は東寺の国宝・両界曼荼羅を撮影します。絹本に緻密に描かれた諸仏の湛える生命感に「エロス」を見出し、また「不二（ふに）（ふたつにあらず）」という仏教思想は、その後の石元の作品や人生観に多大な影響を及ぼしました。今回は、西武美術館での個展「石元泰博 写真 曼荼羅展」（1977 年）での出品作と同規格で制作された、オリジナルの大型パネル（国立国際美術館蔵）を、同時期に刊行された超豪華写真集とともに紹介します。

〈両界曼荼羅〉展示風景

お問合せ・担当：高知県立美術館 学芸課 天野、朝倉　〒781-8123 高知市高須 353-2／Tel: 088-866-8000／Fax: 088-866-8008
Web: https://moak.jp/event/exhibitions/100.html／E-mail: iypc@kochi-bunkazaidan.or.jp
石元泰博作品画像すべて： ©高知県，石元泰博フォトセンター

● **ポートレート**

多数の写真を提供していた雑誌『太陽』での連載「ズバリ現代」などを機に撮影された、同時代の著名人、芸術家らのポートレートを紹介します。

出品：四谷シモン、三島由紀夫、石原慎太郎、横尾忠則、土方巽 など

《ポートレート（唐十郎と李礼仙）》1969 年

● **いろいろな「かたち」**

草花や工業製品、小さなおもちゃなどの「かたち」をストレートに写したシリーズは、被写体の構造や質感を的確につかむ石元らしさが端的にあらわれたシリーズと言えます。四季の花々を植物学的な仕組みにまで踏み込んで写しとった「HANA」シリーズや、企業広告などのいわゆるブツ撮りなど、石元が捉えたいろいろなかたちを紹介します。

《HANA（チューリップ）》1986-87 年

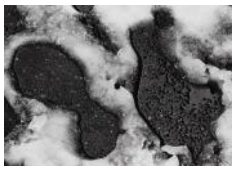
● **伊勢神宮**

石元は、第 61 回式年遷宮の際に伊勢神宮を撮影するチャンスに恵まれました。神宮の関係者に「伊勢の撮影は石元さんで終わりにしたらいい」と言わしめるほど、完璧に、白木のどっしりとした清々しい姿を捉えています。20 年ごとに建て替わる伊勢神宮独特の時間感覚との出会いは、後の刻シリーズへと発展しました。

《伊勢神宮 外宮 正殿 千木と堅魚木》1989-93 年

● **刻　moment**

撮影当時は「うつろい」とも通称された本シリーズでは、路上で踏まれアスファルトにめり込んだ空き缶や落ち葉のほか、雲や雪、川面といった水の変態、そして動くままにブレた道行く人々の姿など、うつろいゆき、変わりゆくモチーフが一瞬の時を刻む写真技術によって克明に捉えられています。肉体や物質が消滅すると、小さな粒子となって螺旋を描きながら宇宙を未来へと上昇していく、と語っていた石元の死生観を投影した瞑想的なシリーズです。



《雪のあしあと》1985 年

お問合せ・担当：高知県立美術館 学芸課 天野、朝倉　〒781-8123 高知市高須 353-2／Tel: 088-866-8000／Fax: 088-866-8008
Web: https://moak.jp/event/exhibitions/100.html／E-mail: iypc@kochi-bunkazaidan.or.jp
石元泰博作品画像すべて： ©高知県，石元泰博フォトセンター

● **シブヤ、シブヤ**

齢 80 を超えてもなお新たな挑戦を続けた石元の姿勢を顕著に示すのが〈シブヤ、シブヤ〉です。被写体となったのはゼロ年代の若者の街、渋谷のスクランブル交差点を行き交う人々でした。当時プライバシー保護への意識が一般に高まっていったのとシンクロするように、本シリーズで捉えられているのは、もっぱら人々の後ろ姿ばかりです。しかし、身に着けられた柄物のテキスタイルや装飾的なバックプリントは、人物の表情以上に饒舌です。ファインダーを覗きこまない撮影手法による偶然性と、半世紀以上のキャリアで培われた確固たる構成力がせめぎあうスリリングなシリーズです。

《シブヤ、シブヤ》2003-06 年

● **多重露光**

モノクロームの美しいプリントが代名詞の石元ですが、50 年代から断続的にカラーフィルムの多重露光による表現にも取り組みました。カンディンスキーなどの抽象絵画を思わせる、色彩と形態が美しく響き合う画面は、コラージュやコンピュータによる合成は一切施されず、偶然性を取り入れながらカメラ機の中で生み出されました。50 年代の実験的な習作から、石元が生涯で最後にシャッターを切ったという 2008 年の作品まで、半世紀に渡るゆるやかな連作を紹介します。

《色とかたち》1990 年代後半-2008 年

● **番外編：ヤスとシゲル―ふたりのあゆみ**

石元の妻・滋（しげる。写真家・土門拳が付けた筆名、愛称。本名は滋子）は、1956 年の結婚以降、2006 年の逝去までのちょうど半世紀に渡って、石元の写真家としての仕事を、アシスタントとしてまたプロデューサーとして支え続けました。茨城県水戸市で生まれ、いけばな草月流の実力派若手として活躍していた滋の半生と、結婚以降の「ヤス（石元泰博の滋や友人からの愛称）」とのふたりのあゆみを、年表と夫妻の旧蔵資料によって辿ります。

《石元泰博　滋》
撮影：篠山紀信

お問合せ・担当：高知県立美術館 学芸課 天野、朝倉　〒781-8123 高知市高須 353-2／Tel: 088-866-8000／Fax: 088-866-8008
Web: https://moak.jp/event/exhibitions/100.html／E-mail: iypc@kochi-bunkazaidan.or.jp
石元泰博作品画像すべて： ©高知県，石元泰博フォトセンター

関連企画

● **対談シリーズ**

＞＞YouTube にて動画公開中！＜＜

写真家・石元泰博と出会い、関わり、共鳴したさまざまな人々が『石元泰博―写真という思考』著者・森山明子氏（武蔵野美術大学教授）と語らいます。

ゲスト

1：飯沢耕太郎氏（写真評論家）
2：原直久氏（写真家）
3：内藤廣氏（建築家）
4：畠山直哉氏（写真家）
5：増田玲氏（東京国立近代美術館 主任研究員）　※近日公開予定
6：太田徹也氏（デザイナー）　※近日公開予定

YouTube 再生リスト

対談シリーズ公開ページ
https://iypc.moak.jp/?p= 3176

関連イベント

● **プレ講演会「 石元泰博の写真、 その深さと広さ」**

高知県立美術館×高知 蔦屋書店×地域文化計画

~~講師：福士理（ 東京オペラシティアートギャラリー シニア・キュレーター／石元泰博写真展共同企画者）~~

~~日時：2021（令和 3）年 1 月 12 日（火）19:00　聴講無料~~

~~場所：高知 蔦屋書店 2 階（ 高知市南御座 6-10）~~

~~定員：20 名~~

~~申込方法：「石元泰博写真展トーク申込」 の件名で、本文にお名前と人数をご記入のうえ、地域文化計画のアドレス（event●opalh.jp）までお申し込みください。~~

~~＊「●」を「@」に変えてください。~~

※プレ講演会中止および代替開催のお知らせ※

1 月 12 日（火）に高知 蔦屋書店で開催を予定しておりました上記トークイベントは、新型コロナウイルス感染拡大の最新状況を考慮し、参加ご予定のみなさまには大変申し訳なく存じますが、中止といたします。なお、福士理氏のご厚意により、今回お話しいただく予定の内容を収録し、後日、配信することといたしました。配信日時、視聴方法については、高知 蔦屋書店 HP、インスタグラム等を通じて改めてお知らせいたします。(2021 年 1 月 6 日　高知県立美術館・高知 蔦屋書店・地域文化計画)

お問合せ・担当：高知県立美術館 学芸課 天野、朝倉　〒781-8123 高知市高須 353-2／Tel: 088-866-8000／Fax: 088-866-8008
Web: https://moak.jp/event/exhibitions/100.html／E-mail: iypc@kochi-bunkazaidan.or.jp
石元泰博作品画像すべて： ©高知県，石元泰博フォトセンター

● **映画上映会「ニュー・バウハウス」＋「ザ・チャーチ・オン・マックスウェル・ストリート」**

2019 年／アメリカ／89 分／監督：アリサ・ナーミアス

出演：出演：ラースロー・モホイ＝ナジ、シビル・モホイ＝ナジ、ハトゥラ・モホイ＝ナジ、オラファー・エリアソン、ハンス・ウルリッヒ・オブリスト、バーバラ・カステン　他

日時：2021 年 1 月 22 日（金）①10：30－／②13:30－／③19:30－　＊開場は 30 分前

場所：美術館ホール

入場料：1,000 円　＊当日券のみ、予約不要。展覧会半券をお持ちの方は 500 円に割引。

ハンガリー出身の芸術家ラースロー・モホイ＝ナジ（1895－1946）の、シカゴでのニュー・バウハウス校長時代を中心としたドキュメンタリー。石元泰博がニュー・バウハウス在学中に学友マーヴィン・E・ニューマンと制作した短編映画「ザ・チャーチ・オン・マックスウェル・ストリート」（約 8 分、16 ミリ、1951 年）もフィルムにて同時上映します。

※終了しました。

● **サタデー・レクチャー「石元泰博のシカゴ時代」**

講師：朝倉芽生（当館学芸員）

日時：2020 年 2 月 27 日（土）14：00－

場所：　1 階　講義室

定員：20 名　聴講無料、予約不要

石元が自身の「視覚の故郷」と語るアメリカ・シカゴ。同地で受けたニュー・バウハウスの教育や、2 度目の滞在の様子を中心に、2019 年に行なったシカゴ調査の成果も交えてご紹介します。

関連グッズ

● ポストカード　24 種、ポスター　8 種、クリアファイル　3 種、ハンカチ 3 種、マグネット 4 種
　製作：Nadiff

● 石元泰博フォトセンター TOSAWASHI MEMO PAPER　2 種
　製作・販売：TOSAWASHI PRODUCTS

● 亀泉酒造 Sparkling 純米吟醸 Perle 石元泰博生誕 100 年特別ラベル
　製造：亀泉酒造株式会社
　販売：土佐市観光協会
　　オンラインショップ https://tosacity.myshopify.com/products/p004

※画像はイメージです。

※詳細はお問い合わせください。

お問合せ・担当：高知県立美術館 学芸課 天野、朝倉　〒781-8123 高知市高須 353-2／Tel: 088-866-8000／Fax: 088-866-8008
Web: https://moak.jp/event/exhibitions/100.html／E-mail: iypc@kochi-bunkazaidan.or.jp
石元泰博作品画像すべて： ©高知県，石元泰博フォトセンター

石元泰博［いしもと やすひろ・1921（大正 10）―2012（平成 24）年］について

1921 年 6 月 14 日、アメリカ・サンフランシスコに生まれる。3 歳のとき両親の郷里である高知県に戻り、39 年高知県立農業高校を卒業。同年、単身渡米するが、間もなく太平洋戦争がはじまり、収容所生活を経験する。終戦後は、シカゴのインスティテュート・オブ・デザイン（通称、ニュー・バウハウス）で、写真技法のみならず、石元作品の基礎を成す造形感覚の訓練を積む。その後、桂離宮のモダニズムを写真により見出した作品で高い評価を受ける。丹下健三、菊竹清訓、磯崎新、内藤廣など日本を代表する建築家の作品を多く撮影していたことでも知られる。

石元泰博フォトセンターについて

高知県立美術館では「石元泰博写真展 1946-2001」（2001 年）の開催を機縁に、石元氏の生前から逝去後にかけて、本人と遺族から段階的に作品、資料を受贈。そのコレクションはプリント 34,753 枚に加え、ネガフィルム約 100,000 枚、ポジフィルム約 50,000 枚、その他愛用の撮影機材や愛蔵書等の資料を含み、公立美術館の有する一人の作家のコレクションとしては類を見ない質と量を誇る。これら石元泰博コレクションを、適切な環境で保存・管理し、継続的な調査・研究を行い、国内外の多くの人々が利用できるアーカイブとして、その価値を一層高めるため、2013 年、石元氏の誕生日である 6 月 14 日に「高知県立美術館 石元泰博フォトセンター」を開設。コレクションを管理し研究する「深める」、展覧会開催やデータベースサービスなどを通じて「広める」、石元氏の人間性や芸術に親しんでもらうための「つなぐ」を軸に活動を行っている。

iypc.moak.jp

石元泰博展示室

東京都品川にあった石元邸の再現コーナー

フィルム保管庫

広報用画像のご利用について

詳細は、下記担当者までお問合せください。

お問合せ・担当：高知県立美術館 学芸課 天野、朝倉　〒781-8123 高知市高須 353-2／Tel: 088-866-8000／Fax: 088-866-8008
Web: https://moak.jp/event/exhibitions/100.html／E-mail: iypc@kochi-bunkazaidan.or.jp
石元泰博作品画像すべて： ©高知県，石元泰博フォトセンター